社会学の名峰の縦走記録

富永 健一著

思想としての社会学

産業主義から社会システム理論まで

本書は標題通りに受けとめれば、一九世紀初頭のサン＝シモンから現代のニクラス・ルーマンまでの二〇〇年に及ぶ社会学の学説史である。約八〇〇頁を費やして記述された社会学のこの流れは、斯界の第一人者によって踏破された社会学の名峰の縦走記録ともいえよう。

「一九五〇年代後半にパーソンズ理論から研究をスタートし、次いで統計学とコンピューター解析による実証研究に転じて一九六〇年代後半から社会階層研究を一〇年以上続け、さらに再度理論の分野に戻って、ヴェーバー社会学と現象学的社会学の研究に従事し」（本書六六三頁）て、さらにはパーソンズを介してのルーマンとの理論的対決を遂行してきた著者は、

重厚な学説史を描く

先行学説との対話を生き生きと記述

合庭 惇

富永社会学と呼ぶに相応しい社会学原理を確立するとともに、原理を支える学説史研究に精力を傾けてきた。

学説史ということでは、著者には『現代の社会科学者』をはじめとして『社会学講義』『戦後日本の社会学』などの著作があり、『社会学講義』には「社会学史の主要な流れ」と題したコンパクトな史的概観が収録されていた。しかし、このたびの新著では趣を一新した重厚な学説史が描かれることになった。

全体は三部構成であるが、本論に先立つ序章の「日本の近代化と西洋思想」では、社会学とは近代性あるいは近代化つまりは西洋化をめざす学問であったことが確認される。そして、西洋化＝近代化の第一歩がサン＝シモンの産業主義としてヨーロッパで踏み出されたのであった。産業主義はオーギュスト・コントの実証主義に連なり、次いでハーバート・スペンサーの自由主義に辿り着くのが第一部。第一部ではスペンサー論が力作で、明治前期には自由民権運動との絡みでベストセラーとなりながらも、その後は長く忘れ去られ誤解されていたこの思想家の復権が試みられる。

第二部では、社会学をアカデミズムにおいて制度化させた巨人たち、すなわち機能主義のデュルケーム、相互行為主義のジンメル、理解社会学と比較近代化のヴェーバーが扱われ、創始期の三人との連続性を踏まえながら社会学がディシプリンとして成熟していく過程が検証される。さらに二〇世紀の現代社会学を取り上げた第三部では、行為と社会システムの思想家としてのタルコット・パーソンズ、このパーソンズとの論争でも知られる現象学的社会学のアルフレート・シュッツ、そして世紀最後の偉大な社会学者であった「社会」の思想家ニクラス・ルーマンの登場となる。

このように各部にそれぞれ三人の社会学者＝思想家を配してバランスよく執筆された学説史の装いをもつ著作であるが、本書は一般にいわれるところの無味乾燥な学説史では決してなく、著者の血となり肉となった先行学説との対話が生き生きと記述されていて、たいへん興味深く読み進めることができる。ここには従来の解釈を排除する新見解が盛りこまれるばかりか、著者自身の過去における誤解も率直に訂正されるなど、隅々まで学問的良心に裏打ちされた見事な記述に満ち溢れている。

本書はルーマンの社会システム理論で締め括られているが、パーソンズ研究から出発した著者の理論研究が同じくパーソンズから強い影響を受けながら社会理論形成に向かったルーマンの思想に一定の共感を示しているのは興味深いことである。ルーマンのキーワードの一つに自己言及システムという考え方があるが、まさに本書は富永健一という社会学者の自己言及＝自己記述が実践された傑作なのである。（あいば・あつし氏＝国際日本文化研究センター教授・情報社会論専攻）

★とみなが・けんいち氏は東京大学名誉教授・社会学専攻。東大大学院博士課程単位取得。著書に「現代の社会科学者」「日本の近代化と社会変動」「社会学講義」「経済と組織の社会学理論」「戦後日本の社会学」など。一九三一（昭和6）年生。

A5判・820頁・8715円
新曜社
978-4-7885-1081-4